この対中強硬運動と騒擾もその流れに含まるならば、
動まで続く。この対中強硬運動と騒擾もその流れに含まるならば、
対中強硬運動の中心を担い、騒擾のきっかけとなる国民大会を主催
した対中同志連合会（以下「連合会」と略す）の存在が注目される。
連合会はこの対中強硬運動ばかりでなく、約半年後に起こったシーケン
ス事件時の騒擾においても、そのきっかけとなる国民大会を主催
しており、大正初年の都市騒擾の流れとなった政治集団だといえるか
らである。本報告では、これまで反満闘の性格をもつ、日比谷焼打
事件を煽動した「国民主義的対外礎派」と同一視されてきたこの連
合会について、内部構造や性格を明らかにし、この運動を前後の政
治運動と都市騒擾の流れのなかに位置づける。

連合会は一九三六年に中国に対する外交方針の確立と満蒙問題
の解決を目的に、郭松平・志村が中心を握っていた」という。この黒
龍会と「国民主義的対外礎派」との提携は、これまでのない異例の事
態であった。黒龍会は伊藤博文・桂太郎・寺内正毅ら華僑政治家や
陸軍の援助を受け、彼らに進言することで自己の理想を実現してい
たのに対し、「国民主義的対外礎派」は反満闘・反清友会を模倣し
て民衆の支持を集め、政界への出撃を図ってきた。両者は対外礎
派をめぐって対立の立場を占め、満州騒擾に対する見解の相違からこ
ら硬ウス conductivityであった。

一方、満州事變の勃発後、日本国内の活動をシフトさせるを得なくなったこと
とともに、半年前に起こった大正政变の影響があった。政变による満
州の飛行機の発見や、陸軍の発言力の低下、満州駐屯地の拡大などが
の切換えが必要となった。そうしたとき、満州事変や政府攻撃の一つの材料
となり、内田とその手を組んでこ
の問題について世論を活性化する利点は十分にある。

しかし、満州事変を政府攻撃の一つの材料
とすべきである。満州事変に訴えられることを警戒する論調は根強かった。
こうしたなかに起こった南
京事件は、連合会にとって世論を活性化する利点は十分にある。

当時は満州事変論を唱えることで、内田とその手を組んでこ
の問題について世論を活性化する利点は十分にある。